

保育の見なおし三年目

— 指導計画の変遷から —

入江 礼子

見直しの痛み

園で保育の見直しを始めて三年目に入った。二年を終えた段階で見直しを始める前からいた保育者五人のうち三人がいろいろな事情で園を去った。今年度に入って間もない五月末の段階で更に一人が家族の看護をしなくてはならない状況となり園を去った。私が園

長兼任になる前からの保育者はたった一人になってしまった。

それぞれの保育者が園を辞めるにあたってはいろいろな事情があったとはいえ、正直に言ってしまえば、「家庭持ち」にはきつい職場になってしまったという事実がある。まず、帰宅する時間が遅くなった。それまでは夕方五時には職員全員で帰れた職場であった。

しかし今は四時を過ぎても、時には五時を過ぎても保育者は職員室に戻ってくる事が出来ない日が多いのが実状だ。明日の保育の準備をするとなるとこういう状況になってしまう。

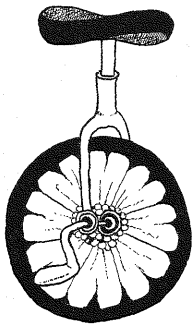
それは一年目の後半から顕著になった。準備をする保育(当たり前といえは当たり前なのだが)に変わるにつれて、子どもたちが思い思いに遊べる状況が少しずつ増え始めた。そうなると保育者は掃除をして元の状況に戻すだけでは保育が成立しなくなったのである。

行事その他にしても例年通りにやることをよしとするのではなく、子どもの状況を見、私たち保育者の思いを勘案したものということになれば一つひとつ見直しが必要になってくるし、新たな準備もいる。過去を参考にはするが基本的には新たに作り出していくというこゝも増え、こうして帰宅時間は徐々に遅くなっていった。また、ある意味ではこの保育現場の伝統を壊

している部分もあるので、優先順位をつけて仕事をすることが難しく、一つ一つ課題を乗り越えていくというやり方でしか進めないという事情もあった。

時間外労働ということになってしまったので、なんとかもう少し工夫をしてやっていきたいのだが、現在でもまだこの状況は続いている。若い担任保育者たちは「この職場は家庭があつたら務まらない」とつぶやいている。私のように担任でない保育者で家庭持ちのものも夫や家族に家事を分担してもらつて何とかしている。幼い子どもがいる保育者や体が丈夫ではない保育者、家族に看護や介護を必要とする人がいる場合は続けるのが困難だ。

準備に準備を重ねる保育者に頭が下がると同時に、このままの状況で良いわけがないと



いう思いも頭をもたげるときがある。「遊びを中心とした保育を展開し、一人一人の育ちを理解した環境作りを行う」ことを目指すということは、こういう痛みのプロセスを通らなければならないのかも思う。みんな得手探り状態であるので、やればやるだけ面白いと思える保育者が残り、面白いかもしれないという思いを持って新たに入ってきてくれた保育者もいるのだが、このままではみんなが潰れるかもしれない。「理念は残ったが、どこかの推理小説の題名ではないが『そして誰もいなくなった』ということが起こりかかない」という崖っぷちに立たされながらの日々である。

そんなことを抱えながら、それでも保育者たちの努力は少しずつ着実に実っているようにも思う。この二年と数ヶ月の間は私たちは指導計画のフォーマットを四回変えた。それはそれぞれ理由があつてのことである。今まで本誌にはこの保育の見直し一年目の、特に

親との関係のところでは書かせていただいたが、今回は園の内側からの保育の見直しの経過を追ってみようと思う。

第一の週日案

一年目四月～三月

園には園日誌や指導計画はあるにはあつたが、担任保育者が書くだけでそれを保育者同士が見合うことも話し合うこともなかったという。そこでまず保育を見直していく上でも、まずは週日案という形で指導計画を立て合い、月曜日に園内研修という形での検討会を持つこととした。第一の週日案はとりあえず園長と副園長からの提案ということでそのフォーマットを決めた。

「ねらい」や「予想される子どもの姿」「今週の行事」といった項目のほかに「環境図と簡単な内容」を置いた。週日案を作り始めた当初から「環境図」が重要であろうことを私と副園長のNさんは考えていた。

担任たちはそこに固定遊具や道具などの位置は記入

したもの、必要な遊具やどの子どもがどんな場所でどんな活動に取り組んでいるかの記入はなかった。ここでは個々の子どもの姿が読み取れず、あまり書く意味がないということが話し合われたのは三週ほど経ってからのことであった。その結果、子ども達が遊びを主体的に選択する時間に、それぞれの子どもたちがどこで活動しているかが視覚的にもわかるように書くということになった。

また二学期に入ると三、四歳児は良く混じって遊ぶようになったのだが、色々な事情から朝の登園後一時間の過ごし方が違う五歳児だけが、なかなか他の学年の子どもと混ざって遊べないという状況が生じた。しかし、この時期にはそれ以上どうすることもできず、異年齢の交流の必要性やそれを支えるチーム保育の必要性は分かったものの、保育の流れを変えるまでには至らなかった。

第二の週日案

二年目四月～六月

二年目に入り、一年目の反省を踏まえ今までよりもより見通しを持って活動できるように週日案を改訂した。項目は「幼児の姿」「週のねらいと内容」「環境の構成」「環境の見通し」「援助」「反省・記録」「保護者との連携」「保育者との連携」であった。新たなことは週日案に記録を連動させたことと、環境図を一枚別紙の形で添付したこと、また保護者との連携欄、他の保育者との連携欄を入れたことである。これは異年齢交流を支えるための週日案ということを意識しての改訂であった。

しかし実際にやってみると月曜日の園内研修の段階では当然、今週分の反省・記録の欄が白紙であり、とって先週分の記録分を読みあうだけの時間的余裕はないことが分かった。環境図が独立し書くスペースが広がったことは、担任保育者がより環境の準備や手

立て、子どもたちがどこで誰と遊んでいるかなど細かく予想して描くきっかけになった。保護者との連携欄には保護者と向き合わなくてはならない問題が書かれるようにはなった。しかしそこまで手いっぱい、最下段に設けられた他の保育者との連携欄を書くには至らず、この欄は置かれていてもほとんど機能しなかった。

第三の週日案 二年目六月から三年目五月

結局詳しく書くことができるようになった第二の週日案ではあったが、現実にはそれを検討するには余りにも煩雑であることが分かり、園内研修の時間だけでは時間が足りず、労力を使う割には保育者全員で検討するには無理がありすぎるということで、二か月ほど使った段階でまた改訂を加えることになった。

今回の項目は「先週の幼児の姿」「週のねらいと内容」「予想される子どもの姿」「環境の構成と保育者の

援助」「環境図（人的環境・物的環境・配慮・子どもの動き等）」「行事及び一日の流れ」とした。

保育後記録は「週の記録」ということで別紙に独立させ、これは皆に回覧することにした。また第二の週日案では別紙になっていた環境図であるが、詳しくは書けているものの別紙であることが他の保育者にとつては見にくいという反省もあり、今回は再び週日案の中に少しスペースを広くして入れ込んだ。

さらに「他の保育者との連携」欄であるがこれが前回全く機能しなかった反省を踏まえて週日案の中心位置に置くことにした。この時期、子どもたちが異年齢同士遊ぶ姿が多くなり始め、保育者間の連携の必要性も高くなったわけである。この欄に書かれる内容は保育者が協力して行わなくてはならない作業の確認や、子どもたちのことで確認しておきたいこと、共通に使



う場所についての確認や提案などであった。しかし何よりもこの欄を中心においたことで、保育者全員がこの欄を注目することになり、週ごとの園内研修の折にもどうしても発言が少なくなりがちな若手保育者の提案の場として、またそれを発端にした意見の発露の場として機能するようになっていった。

週の記録は保育者間で回覧することにより、週日案だけでは分かりにくい担任をしていない子どもたちの育ちがより理解しやすくなり、異年齢で混ざり合うことを目指したティーム保育実践への小さな足がかりとなっていた。

第四の週日案

三年目六月から現在

園内研修の折には特に環境図の検討を中心にして話し合いを進めてきた。第三の週日案は約一年間改訂をしなかったことになる。三年目を迎え、三人の保育者が去り、新しく三名の保育者がメンバーに加わった。

この中には他園での経験者もいる。約七十名の子どもたちとスタートした三年目であるが、四月、五月は子どもも保育者も新しい環境に慣れることと、園の中心の基地を探すことで精一杯の日々を送った。

五月末、園の保育者がそれぞれ「なんだか一つの山を越えたみたい」という印象を持つようになった。そんな状況の中、園内研修の折に、新しい保育者から提案があった。第三の週日案では重複が多すぎ、もう少し簡素化できないかというものであった。「環境図を書く段階で、自分たちは先週の子どもの姿も、予想される今週の子どもの姿も、環境の構成も、保育者としての援助も考えています。だからこの環境図を書く以上、今の週日案にある『先週の子どもの姿』と『予想される子どもの姿』と『環境の構成と保育者の援助』の欄はいららないと思います。残すのは『週のねらいと内容』、『他の保育者との連携』欄と週の流れの部分で十分ではないでしょうか。あとはすべて『環境図』と

して空白のスペースにしたのですが……」。

この提案には他の保育者も賛同の声をあげた。「書くことが多すぎます。自分たちの自由裁量を増やすことで、自分たち自身で選択できるのがいいと思います」。

こうして第四の週日案が生れた。書く内容は担任保育者たちが話し合って決めた。保育の見直しを始めて丸二年が過ぎていた。ここで初めて私たち園長・副園長が担任保育者の話を聞いて週日案の項目立てをするのではなく、担任保育者自身が自分たちにとって使いやすいものを作り上げた。もちろん今の段階では第三の週日案の改訂版という感を否めない。しかし決められたフォームを埋めるという方ではなく、自分たちで取捨選択し、自由裁量を増やしたものにしたいという提案はこの二年間では画期的なことである。保育者間で共通理解しなくてはならない項目はしっかりと残り、あとは自分たちらしくというこの提案は、この日

がくるのを夢見ていた私たちにとっては大げさかもしれないが「天にも昇るほど嬉しいもの」であった。

第四の週日案は学年ごとの共通理解とねらいや内容を話し合うところから作られている。その後は各担任保育者が思い思いに目の前の子どもたちの姿を思い浮かべつつ一週間を振り返り次の一週間を見通しながら作られる。ある新任保育者はそのスペースに「保育者としての課題・目標」を設けた。そして今悪戦苦闘している「保護者との信頼関係をつくる！」ことをその第一に掲げた。ある保育者は「子どもの関係図」欄を設けた。それがあることでクラスの子どもたちの関係を担任がどう捉えているかが一目瞭然となった。それを見た他の保育者が「○○ちゃんとうちのクラスの△△ちゃんは良く遊んでいるわよ」と声をかける。それを見て聞いてまた子どもたちの様子を捉えなおす。そうして出来上がったものを検討しつつ実感することは、「本当に読むだけでそのクラスの様子が手にとるようにわ

かる週日案」になったということだ。読めばできることが増えたことで、園内研修の時間に自分のクラスが今週どう過ごすかということをいちいち説明しなくても良くなった。その分、もう少し、今抱えている子どもの問題や、保育者自身の保育への取組みについて突っ込んだ意見が交わされるようになってきている。もちろんこれも時には痛みを伴うことではある。

おわりにかえて

三年目に入ると、さすがに一年目のように保護者からの保育形態や内容に関する疑心暗鬼は少なくなってくる。それは保育の方針を聞き、それでよいという保護者が子どもたちを入園させてくるからである。そうになると、今後はその内容に関しては不断の努力が要求されるようになる。まだまだ発展途上の若い保育現場である。先にも述べたが、保育にしても、その裏方仕事にしても、優先順位をつけることができるほどの知

恵がまだ蓄積していない。保育の準備あり、書き仕事あり、幼・小・中・高・大とある併設校の連携やら連絡の仕事もある。現場はもういっぱいっぱいの状況であることは変わらず、週日案を自分たちにとって書きやすくなったからといって、それだけでは仕事は減らない。一クラスが二十人前後でもこんな状態である。

保育者一人ひとりが「動く指導計画」の域に達し、保育現場が成熟しなければこの忙しさからは開放されないのだろうか？ 私立園であるという状況で、保育者はバーンアウトせずに今を生き残り、子どもたちとの生活をもう少しゆとりを持って過ごせるような知恵は保育界に蓄積されているのだろうか？ こんなことを思いつつ、保育者たちがなんとか一学期を健康に過ごせるように裏方としての役割を全うしたいと考えている。

(鎌倉女子大学・同幼稚部)